

お畫かき雜感

眞白い畫洋紙に、太いクレヨンで線を引く。曲る。伸びる。まるまる。そのうちに畫面にはタンクが畫ける。軍艦が、お人形が畫ける。小さい手に握りしめたクレヨンで、自分のかつて見たもの、又自分の想像してゐるものを畫く時こそ幼児達は、大畫家がカンバスに向ふ時の様に、眞剣で且つ喜びであります。

四月入園當初 目の前に出された、畫帳ミクレヨンに、いきなり畫いた繪をみます。私達からみるこ一本の線ですがそれが人であり、電車であり、靜物であるのです。直線が曲線に、曲線が圓に變化して次第に大入道の様な人の顔がかける様になります。大入道に手足がつかまりました。やつこ貧弱ながら胴がつかまりました。此處まで参ります。畫題も次第にきまり、電車、汽車、自動車、お嬢さん、お家、お花等もかくやうになり、形もそれらしくになります。

線のしつかりしてゐる上手な絵をみます。幼兒でも、はじめは、線畫で、しかも一物體をぼつん／＼と孤立的に畫い

附屬幼稚園 上 遠 文 子

てゐます。「色を塗つていらつしやい」を教へ、それに背景なるものを教へ、一つの繪になる様導いて來ました。線もしつかりして形もさ／＼のつてゐる幼兒はそれからぎん／＼上手になります。線のしつかりした幼兒に比べ、線の不明瞭、即ち一つの輪廓でも澤山の線、ひげ線をかいてしまふので、しつかりさ／＼の直線になるまでは却々かゝる。しかし一概に、云へず、ある幼兒は、側でみるに實に線が不明瞭で形もはつきりしないがしかし一歩離れてその繪をみる時、さてもよく出來て、又生きてみえる繪をかく。繪をみるに殆んど、大小の斜線で畫かれており、すらく／＼と畫くクレヨンののはこびにいつも感心してながめてしまふ。この様にして度重なる毎に、月日を経る毎に、進歩し、國民學校へ行く頃は、立派に一幅の繪をかける様になります。幼兒は、お友達の上手な繪をみて感心し、眞似をします。次第にそこに進歩をもちますが、又指導も必要の様です。「自分はあれを畫きたい」と頭の中には立派に浮んでゐる

ます。しかしいざクレヨンを手にし表現する時、さうしてよいか手がうまく、自分の理想通り動かないとする、こてもく、残念でたまらないでせう。その時、自分の手持つてすらく、こ畫いてくれたならそんなにくうれしいでせう。こ私は考へ、時々思ふ様にはこばない幼児の手を取り、畫いて居ります。又、畫全體、又一物質が物足りない時、こんな時も畫面を賑やかにするため、手を持ち畫いて居ります。しかし依頼心の強い子にはしたくないのでこんな事はたまの事です。大抵は口で、畫面のおぎなひを教へ幼児自身にかゝせます。幼児は誰でも畫く事を好みます。それをいつまでも續けさせたい。思ふ様にかけぬから嫌だ、其處に隙をつくらぬ畫く事の樂しみをいつまでも捨てぬ様にして上げたいものです。下手ながらも自分の考へをかき出せる様になる、幼児は畫面に入り込んでしまふ。例へば、戦争の繪をかいてゐる。日本の軍艦、敵の軍艦、空に飛行機、立派な繪がかけてゐる。その中畫は活躍し始め、空からは敵の軍艦を爆撃はじめる。軍艦からも大砲をうちはじめた、その中に敵からもうちすゝめ、はげしい戦争になる。その時幼児は赤い焰をかきながら、さんく、こ大砲の音を出しながら一生懸命。さながら自分が大砲がかかりの様に。その中、大砲も命中、爆弾も命中、ミクレヨンの赤い線が敵の軍艦までのび、たうたう燃え出して沈んで

ります。こ敵の軍艦は眞赤に塗りつぶされた。その時の畫面をみる、軍艦も飛行機もみない位、眞赤に、交互の線が亂雑に、みる蔭もありません。思ふ存分戰はせた末、「はい出來ました」こ持つて來るのです。その眞剣なる戦争の最中の幼児をみる時、本當にほゝえましくなつてしまひます。

お畫かきを用ひて觀察する事もあります。季節のお花さか、珍しいものがあつた時さかお道具さか、いはゆる寫生なるものも致します。「これをかきませう」こ決められる、こ難しいらしく、あまり喜びません。實物をみて畫くのですから、正確です。物をよくみる習慣、正確にかく習慣がつくでせう。氣のつかぬ所は、實物さみ比べてみさせる様、注意する必要があります。

この四月年長組になる組なので年長組のお畫かきを皆に期待しつゝ、一年の私のお畫かきに對する處置法を考へ直してみました。